

秋逍遙

(昭和四十五年寮歌)

熊野芳明君 作歌

吉田守男君 作曲

未明

秋に秋添う時雨月
曙星瞬く恋々と

されど近づく蕭晨に

幽愁はつのるせつなくも
落涙しばし悄然と

払曉

蕭晨は来にけり石狩野
野菊に滴る血の雫
木の葉さやぎぬ涼風に
野を流離えば深き哀愁
情けの露を探求むなり

昼

遙かに煙る大平原
蕭然秋の小糠雨

原生林の錦も色寂し

黒俊馬の長嘶に沈思破れ
秋の情趣を知る二十

落葉

時雨もやみてあかねさす
赤紫雲の黄昏に
夕陽返し珠玉の如
蜻蛉が翅翎に我が久懷
真情の友へと託すかな

初更

釣瓶落しの秋の日の
紫紺の闇に淡く浮く

利鎌の秋月はあな悲し

きらめく長庚にただ涙
己が運命か斯くあるが

深更

夢幻か人の世は
秋の百子夜に我悄然
地平の彼方へ冴星空を
過りて落つる流れ星
ただただ涙は何故か